

---

# クローリアス～ハジマリノウタ～

kanon

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クローリアス～ハジマリノウタ～

### 【NNコード】

N6965M

### 【作者名】

kanon

### 【あらすじ】

クロイツ王国第一王女シェナリアスは、優秀な兄と姉を持ち、魔法も勉強も苦手な十四歳の女の子。

聖なる光と漆黒の闇。

精靈と魔族。

クローリアスと呼ばれる世界の運命をかけた戦いが今始まる…

「戦いなんてどうでもいい。あなたに消えてほしくない。側にいてほしい、だから……」

世界の危機を救うため、旅立つシエナと、仲間達の冒険ファンタジーです

注) 本編の方は現在シェナリアスになつております。  
次回から、シエナとして活躍します (\*'▽'\*)ノ

\* \* \*

文章は上手くはないです w  
それでも、最後まで書きたいと思つてるので、よろしくお願いします  
また、読んでくれる方にはとても感謝いたしました

## 1・記憶のカケラ

むかし、むかし。…あ、そんな昔でもないのか。  
まあ…そこら辺はあまり気にせず、クロイツ国というお城に、シ  
エナリアスというかわいらしい女の子がありました。  
彼女は、三人兄弟の末っ子で、病氣をすることもなく、勉強をす  
ることもなく、元気に過ごしておりました。  
そして今日は四才の誕生日。

彼女の誕生を祝い、城では盛大に舞踏会が開かれています。

「シヒナリアス。こっちへ来なさい」

クロイツ国、コラート王。

実はね、その王様がわたしを呼んでいるの。

「はい、お父様」

大きな声で、はつきりと返事をして、お父様の待っている玉座まで歩く。

もう分かったでしょ？ そう、お父様がこの国の王様なんだよ。  
つまりは、この國のお姫様。すごいでしょ？

今日は特別な日だから、薄ピンク色のふんわりとしたかわいいド  
レスを着させてもらつたの。

リボンもいっぱい着いてて、お気に入りなんだ。

でもね、ドレスつて歩きにくいんだ。すぐに裾を踏んで、転びそ  
うになっちゃう。その度に、兄様とお姉様に起こしてもらつたんだ  
よ。

だけど、今はがんばって一人で行かなくちゃいけないから、ゆつ  
くり、ゆっくり階段をあがるの。

お父様の待つているところまで行くと、ドレスの裾を持って、軽

くえしゃく（会釈）をした。

これはね、とっても大切なご挨拶なんだって。

「この日のために、いっぱい練習したんだから。

「うん、よく出来たぞ。シェナリアス、偉いな

そう言つて、わたしの頭をなでる。

「えへへへへ」

これくらい簡単にできるもん。だってわたし、この国のお姫様だもんね。

今日はわたしの四才のお誕生日。

そのお祝いのパーティーなんだよ。

お客様、いっつぱい。

お隣の国からとか、違う大陸からとかも、偉い人が来てるんだって。

「はんも、お肉とか、お魚とか、果物とか、いっぱい、いいっつぱいあるんだあ！」

ぎゅるるるるう…。

あはは、おなかなつちやつた。

「はんはいっぱいあるけど、この挨拶とかをしなくちゃいけないから、まだ食べちゃダメなんだって。

早くこのはん食べたいのに…。

これだから、コウム（公務）って大変なんだ。

つていうのは、お父様がいつも言つてたのをまねっこ。

パーティーは始まつたばかりで、これからお父様のこの挨拶。それから、隣国の王様や王妃様へのこの挨拶のために、お父様と一緒に歩いてまわるの。

わたしは一緒についていくだけだから、つまらなさそうだけど。だって、大人の話つて難しすぎて分からんんだもん。

もうちょっとと同じくらいの子がいてくれたらいいのになあ…。

あ、でも男の子はダメね。幼稚なんだもん。

さっきね、パーティーが始まる前に、なんとか国の王様がお父様のところに来てご挨拶をしていたんだけど、わたしと同じくらいの王子様も一緒にいたのね。それで、お友達になれるかなあと思つて

お話をしたら、「チビ…」って言つんだよ！？

ちょっと背が高いからって、失礼しちゃうんだから。

名前は聞かなかつたけど、今度会つたら絶対に文句言つてやるんだもん。

嫌なことを思い出して、一人でかつてに怒つていると、どこからか見られている感じがして顔を上げると、たくさんのお客様がお父様のお話を聞いている。

あ。いけない、いけない。今は笑顔でいなくちゃいけないんだつた。

でも、パーティーってほんと退屈だなあ。

みんなはこうこうの憧れるつて言つけど、本当に楽しくなんかないんだよ。

お父様のお話とかも、最初はショナリアスおめでとうつて言つてくれるんだけど、一通り紹介が終わつちゃうと、今後の国の大ツン（発展）問題とか、ザイセイ？（財政）のお話とかで、全然分からなくなる。

あーあ、つまんないなあ。

町の子だつたら、お母様がケーキを焼いてくれて、家族みんなでお祝いとかしてくれるんだろうなあ…。

そんなこと言つたら贅沢だつて思われちゃうかもしれないね。

こんなにたくさんの人にお祝いしてもらつているのにな。

でもね、たまにだけど、普通の子に生まれたかつたつて思つちゃうこともあるんだよ。

わたしには、お兄様とお姉様がいてくれるけど、お一人とも勉強とかで忙しいから、あんまり遊んでくれないし。

そういう時、町の子だつたら、近所のお友達と一緒に遊んだりして、楽しい毎日を過ごしているんだろうなあって、憧れちゃうんだ。だつて、お友達たくさんほしいもん。

ふう…。なんだかとっても寂しい気持ちになつてきちゃつた。お父様のお話、早く終わらないかなあ。ずっと笑顔でいなくっちゃいけないのって大変。

あ～あ…。

今日はわたしが主役なのに、なんでこんなにつまらないんだろう。

ようやくお父様のお話が終わつて、会場にはゆつたりとした音楽が流れる。

ダンスの時間だ。

お父様も、お母様と一緒にダンスを踊つているし、お兄様やお姉様も、知らない人と一緒に踊つている。

でも、わたしは見てるだけ。

だつて踊れないんだもん。

もちろんダンスのレッスンは受けたんだけど、大人とは背が違いすぎて無理があるし、会場には同じ年くらいの子はいるんだけど、近寄つてきてはくれない。

「はあ…」

みんなの楽しそうな顔が嫌になつて、ちよつとだけお外に出てみることにした。

玉座の横にあるカーテンをひらりとめくり、われつと隠れる。

幸い、誰にも気づかれなかつたみたい。

バルコニーに続く扉を開けると、噴水が目の前にあり、白いお花がいっぱい咲いていた。

さすがに誰もいない。

う～つ。初春とはいえ、三月はまだまだ寒いなあ。上着持つてくればよかつたなあ。

なんて思いつつ、とつあえず噴水横のベンチに座る。

「独りぼっちだね……」

ぱつりとそんな言葉が出てきた。

そして、なぜかぽろぽろと大粒の涙が溢れてくる。

「つべ。つべ……」

せつかくのお誕生日なのに、寂しい…。寂しいよ。

勢いよく溢れた涙が止まらなくて、やがてわんわん流れ出でてくる。

せつかくのドレスも涙でぬれちゃった。

どれくらい泣いていたか分からぬけど、結構長い間外にいたと思う。

でもね、誰も探しに出てきてはくれないんだ。

わたしのことなんてどうでもいいのかな？

なんて考えて、また寂しくなつてきちゃつた時だった。

「泣かないで」

とても優しそうな声だった。

ハツとして顔を上げ、両袖で涙をふいて、辺りをキョロキョロ。

でも、誰もいない？ もしかして、気のせい？

「だ、誰？ 誰かいの？」

恐る恐る声をかけてみた。

返事はなかつたけど、コシコシ…と、じかへ近づいてくるの足音が聞こえてくる。

音のするほうを見てみると、誰かが歩いてくるのが分かつた。  
やつぱり聞き間違えじゃなかつたんだ。

最初、暗くて姿は見えなかつたけど、やがて月の光に照らされて、  
声の持ち主が姿を現した。

「脅かしてごめん」

と、気まずそうにする男の子。

さらさらとした金色の髪に、白いタキシード。

年はわたしとあまり変わらないさうだけど、彼の方が年上な気がする。

誰だろ？ どこかの国の貴族さんかな？

なんて考えていたら、向うから離しかけてきた。

「君、シオナリアス様だろ？ セっかくのお誕生日なのに、なぜこんなところに？」

そういうながら、胸のポケットから白い縄のハンカチを取り出し、わたしに差し出したの。

「え？ あの…。わたし…」

対応に困って、ドレスをギュッとからんでいた。

「あ、ごめんね。変なこと聞いて」

慌てて、ふるふるふる。と首を振る。

「いらっしゃ、『めんなさい』です」

なんか、とっても恥ずかしかったんだ。泣いているところを見られちゃったしね。

「隣、座つてもいいかな？」

「うん…」

きつと悪い人ではない。それは直感で分かった。

ベンチに一人並んで、しばらくの沈黙。

だって、何を話せばいいのか分からないんだもん。

こんな風に、男の子と一緒にいるなんてこともなかつたし。

ちらりと男の子を見ると、彼もわたしを見ていて、ニコラと笑つたの。

ドキッ！ ！

今まで感じたことのない感情だつた。

すじく胸がドキドキしてる。

笑顔がすごく優しくて、思わず顔が赤くなっちゃつた。

「パーティーは退屈？」

と、言つたのはもちろん彼。わたしはうなずくよつて、小さな声

で、

「…うん」

と答えた。

「そつか。そうだよね。僕のお城でもよくパーティーをするんだけど、退屈でさ、よく途中で抜け出したりしているんだ」

「えつ？ あなたのお城？」

「あ…。うん。僕も君と同じような身分のものだよ」と、照れくさそうに話してくれた。

ほえー。じゃあこの人、どこかの国の王子様だよね。ここまで聞いたから、どこの国か？ って言つのが一番気になるわけで、もちろん訪ねてみたんだけど…。

「どこの国な…」

「秘密…！」

「えつ！？」

「どこの」と「秘密」はほぼ同時だった。

彼を見ると、いたずらっ子のような顔で笑っている。わたしはといふと、面食らつたような顔。そりやそつだよね。

「ショナリアスつてば面白いなあ」

「ぶうー！ ひどーい！ ふうんだ」

ふくつと顔を膨らませ、拗ねてみる。

「あ～。僕が悪かったよ。ほらほら、拗ねない」

わたしは彼のおろおろと慌てている姿を見て、彼はわたしのふくりと膨らませた顔を見て、同時にふはつと笑つてしまつた。

「あはははは」

「ふはははは」

楽しい。いつも男の子と一緒に笑いあつて、今までなかつた。

「もう、大丈夫そうだね」

「えつ？」

「あ、ほら。笑顔…」

そつか。さつきまでわたし、泣いていたんだもんね。

彼のおかげで、すつかり寂しい気持ちが飛んで行つちゃつた。

「あ…。ありがとう」

「どういたしまして」

と、笑顔で言つてくれた。

うー…。この笑顔すごい。

でも、わたしつてばすっかり元気になつたかも。ほんと、彼のおかげ。

あ、お城では最後の曲が流れている。この後はわたしからの挨拶。そろそろ戻らないといけない時間だ。

分かつてはいるんだけど、なかなか足が動かない。

だつて、こんなに楽しい時間を過ごしているんだもん。

「あ、そろそろ終わりだね」

わたしがいえなかつた言葉を彼が言つ。

「うん…」

「確かに」の後はショナリアスの出番じゃなかつた？

「そうだよ…」

「そつか。じゃあ…。そろそろお別れだね」

グサッ。つと突き刺さる言葉だつた。

分かつてはいるんだけど、やつぱり寂しいもん。

でも、これ以上は迷惑かけられないもん。

ギュッと手に力を入れ、無理やり笑顔を作り、

「今日は本当にありがと。またいつか…」

それだけ言つて、背中を向けて城内へ戻るつとした。

その時、ギュッと手を握られた。

「ちょっとだけ待つて」

驚いて、振り返る。

「な、なあに？」

「あのせ、ちょっとだけ、僕と踊つてもらえませんか？ 下手だけ

ど、シェナリアスとの思い出に、一緒に踊りたいんだけど…」

そう言われちゃつたら、断れるわけがないよね。内心すこべりでギキしちやつてたし。

「ち、ちょっとだけなら…」

さつき、たりげない素振りを見せちゃったから、ちょっと気まずかつたけど、やっぱり踊りたい。

「よかつた！ では…」

そう言って、わたしの手を取り、音楽にあわせステップ。風が気持ち良い。

「今日、僕が会場にいたのって気づいてた？」

踊りながら彼が話しかけてきた。

「ううん。知らなかつたよ。お父様が、堂々とした姿を見せるために、真正面を向いていなさいって言っていたし」

「そつか。残念。僕、一番前にいたのになあ」

「えっ！？ 一番前？」

「ショナリアスつてば、笑つたり怒つたり、いろんな表情を見せてくれるんだもん。面白かったなあ」

「むう。また面白いって言つたあ」

「あはは」

楽しい時間はあつという間。最後の曲もそろそろ終わり。今度こそ本当のお別れの時間がやつてくる。

ダンスを止めて、噴水の前に向かい合わせで立つ。

「わたし、戻るね」

「うん。今日はありがとう」

「いやだなあ。わたしがありがとう。だよつ」

「ははは。僕は何もないよ」

寂しい気持ちはいっぱいあつたけど、今は楽しかった気持ちのほうが強い。

「あのわ…。また会えるかな？」

「もちろんー。絶対に会えるよ。すぐには会えないかも知れないけど、いつかきっと僕から会いに来るから。その時は名前と国、ちゃんと教えてあげる」

あ、そういうえば名前すら聞いてなかった。

「じゃあ、約束だね！ 次会えたときに、もうとこうこうお話をしよ

うね

「ああ！ あ！ ほりせり。そろそろ本当に戻らないと！ ショナ

リアスがいないと大騒ぎになっちゃう」「う

「そうだった！ それじゃあ最後の挨拶、ちゃんと聞いていてね」

「ああ！」

時は経ち…

ショナリアス、十四歳。

あの日から、もう十年が過ぎました。

結局、那人とは会えていません。

あなたは今も、わたしのことを覚えてますか？

## 悪夢の足音？

「ふん~ ふふん~ らん、ららら~」

お城の敷地にある庭園。

四月といふこともあり、色とりどりの花々が色々な表情を見せてくれる。

城の庭師達が世話をしているだけあって、手入れはばよつち。午後の優雅なひと時に、のんびりお散歩しながら過ごすのもいいよねえ。

気分は上々で、スキップしちゃつたり、ぐるぐる~って回つたり、ほんと気持ちいいなあ。

空を見上げると、雲ひとつない青空。

うーん、風が気持ちいい。

そうそう、わたし、ショナリアス。

一ヶ月ほど前に十四歳になつた、なんの取り柄もない女の子です。あ、一応クロイツ国第一王女やつてま~す。

まあ王女と言つても、優秀なお兄様やお姉様のおかげで、わたしは公務をすることもなく、だらだら~つて過ごして一日が終わっちゃつて、なんかダメダメな感じ。

そんな毎日に、憂鬱感があつたりなかつたり…。

あ、別に何もしていない訳じやないのよ？

一般的知識や魔法学の勉強の他にも、踊りや料理なんかも習つて、将来的には立派になれるように努力はしているの。

ただ、勉強は大の苦手。特に、体を使わない勉強はダメ。地味なのは向いてないんだ。すぐ眠くなっちゃうもん。

魔法学なんて、何度も教わつても頭の中に入らないのよね。それで叔父様に何度も怒られたことか。

あーあ。外の学校とかで勉強ができたら、お友達もたくさんできて、勉強教えあつたり、今とは違つた感じになつてただろうなあ。ほら、身分的には王女様じやない？

外に出て何かあつたら大変！ つてことで、滅多にお城から出でられないんだ。

あああ！！ わたしつてば鳥かじの中の鳥なのねえ…。きっとずつと出られないんだわあ～…。

つて、変なことやつてる場合じやないね。

まあそれもこれも、わたしがまだ未熟だからつてことなんだ。もし一人前になつて、お父様やお母様に認められたら、わたしもいろんなところにいけるようになる。

現に、二十歳になるシバお兄様と、十八歳のサイベリアンお姉様は、わたしなんかよりとつても優秀で、国の代表として各国を飛び回り、公務をこなしてゐる。

今も出かけていて、お城にはいないの。  
う～つ。わたしも早く認められて、お城を出て世界各地を観てまわりたいんだあ。

お城の外は知らない世界が広がつていて、素敵なんだうつなあ…。

両手を広げ、思いつきり背伸び。

う～つ。気持ちい～！！

なんか、頑張れる勇気がわいてきたよお。

ぱたぱたぱた。

庭園の中を誰かが走つてくる。

誰だろ？

と振り返ると、

「姫様～！！ 姫様～！！？」

といつ声が聞こえる。

この声は、メイドのマリーヌだ！

わたしは、彼女に分かるよつて大きく手を振り、叫ぶ。

「マリーヌ。ここよ～。どうしたの？」「

わたしの姿を見つけるなり、黒髪のおさげを揺りしながら走ってきた。

「んもう、姫様！ やつぱりいらっしゃったんですね。もつすぐ魔法学のお時間だところに、お部屋に居られないんですからと、庭園の時計塔を指差した。

時刻はもうすぐ一時になろうとしている。

「あれつ！？ 今日つて魔法学あるの？？ わたし聞いてないよ？」「あるんです！ 昨日ちやんとお伝えしました！ ほらほら、早く戻つてくださいませ。もうジーニャス様はお見えになつてるんですよ！」

と、人の気持ちも知らないで背中を押すマリーヌ。

「ああ～ん。勉強なんてしたくな～よお。そつだ！ 代わりに授業受けとよ」

駄々をこね、突拍子もない発言で、マリーヌは足をペタッと止めると、お化けのような形相で顔を向けてくる。

「ひ～め～わ～まあ～！？ 何をバカなことを言つてるんですか！

！ 姫様にはいっぽい勉強をしてもらつて、魔術師長として、活躍されているサイベリアン様のよつになつていただかなくてはならぬいのですよお」

ひいいいー！ い、怖いよお。

「そ、そんなこと言われてもお。お姉様が立派にやつてるんだから、魔法へたつぴのわたしなんて必要ないよ。邪魔になるだけだし。それに、数年もしたら他国へお嫁にでも行くんでしょ？ だから、魔法なんてやる必要ないと思つた。だから…」

負けじと言い返すんだけど、問答無用！ といつた感じでさうこ詰め寄ってきた。

「必要あるんです。他国だって、王族ならば魔法くらい出来なければ、どういう教育をしてきたのか！？ ということになるんです。そうなつたら、姫様はクライツ国の評価を下げかねないんですよつ！？」

と、人差し指を鼻に差し向けた。

「うぐぐつ……」

せ、正論でござります。

この世界では、魔法が使える者＝王族の証。といわれるくらい、魔法はわたしにとって大切なものの。

まあ、人工的な魔法は能力さえあれば誰でも使えたりするんだけど……。うーん。そちらへんの話はややこしいから、今度詳しく話してあげるね。

とりあえずは、わたしが魔法を使えなかつたら、王女と認めてもらえないってことに等しいってことなんだ。

あ、言つておきますけど、わたしだつて一応は使えるのよ。まあ……。初歩の初歩なんだけどね。

でもさ、初歩でも使えれば王族の証になるわけだから、問題ないと思うんだけどなあ。

なんて甘いことを考へていると、

「姫様。初歩の魔法が使えるくらいで、良いわけないんですからねと、貴方の考へは分かつてるんですけど……と言わんばかりの表情のマリーヌ。

「あう）。マリーヌの意地悪……でも、ほんとなんでもわたしの考えてること、分かつちゃうんだね

わたしが目をぐるぐると見て聞くと、呆れたようになため息をついた。

「はあ……。分かりますよ。何年一緒にいると思つてるんですか？ もう八年ですよ！？ 姫様は行動と発言に成長がないからすぐに分かります」

「あは……。あはは……」

行動と発言に成長がないなんて、酷すぎるわ。  
まあ本当のことだから仕方ないんだけど。

そうそつ、マリーヌはわたしより五歳年上の姉さん。  
幼い頃に両親を亡くしていて、身内が誰もいないの。  
まあ普段はそんなことも感じさせず、わたしのために一生懸命働  
いてくれている。

でもなんだろな。わたしはお世話係つていつよつ、お姉ちゃんみ  
たいな感じで接しちゃうんだよね。

サイベリアンお姉様は忙しくて全然会えないし、会つても落ちこ  
ぼれのわたしとは口をきかないし。

正直姉妹つて思ったこと、あんまりない。だから、マリーヌとい  
うこうやり取りをしていると、なんか良いなって思つちやう。  
後ね、マリーヌほどメイド服が似合つ人もいないと思つんだよね。  
なんて、発言がおじさんみたいだけど。

わたしがにやにやしていると、再び眉間にしわを寄せてジッと見  
た。

「姫様つてばわたしの気持ち分かってるんですか！？　にやにやし  
ちゃつて気味悪いですよ」

こけつ。

「んもう。気味悪いなんて、失礼しちゃうんだから」  
わたしの気持ちも知らず、マリーヌは怪訝な顔をしている。  
ふうんだ！　お姉ちゃんみたいつていうの却下しちゃうもんねつ。  
なんて勝手に思つていたとき、

「あ～～！」

と、突然叫んだのはマリーヌだつた。

「ちょ、ちょっと何よおーー！」

あまりにも大きな声だったので、思わず耳を塞いぢやつた。

「もう一時過ぎちゃつてるじゃないですか。さあ、早く戻りましょ

う！ これ以上待たせたらわたくしクビになっちゃいます～  
と、半泣きだ。

「もう叔父様帰っちゃってるわよ。だから大丈夫だつて。…つて…」  
強硬手段なのか、強引にわたしの手を引っ張るマリー・ヌ。

「大丈夫！ ジゃないんです。もうこいつなつたら意地でも連れて行  
きますからね！…」

と、ぐいぐいと引っ張っていく。

「ええ～！！ やあだあ～！！！」

結局、抵抗もむなしく、自室に戻ることになつたんだ。

## 悪夢の足音？

ふんわりとしたローズティーの香りがわたしを優しく包む。  
さつきマリーヌが入れてくれたんだ。

あーあ。窓からはぽかぽかした陽気が差し込み、頭もぽつかぽか。  
マリーヌに部屋に連れてこられて、すぐさま叔父様の長いお説教。  
それだけでも疲れたつていうのに、こんなで勉強なんか身につくわけないよ。

今も、一生懸命叔父様が教科書を片手に話していると叫うのに…。

「うつら、うつら…。ううつ、まぶたが重い。  
うつら、うつら…。ダメダメ！ 寝たらダメだつてば…！  
うつら、うつら…。……。

「シェナリアス！ 聞いているのかい！？」  
「わああっ！！」

もう少しで気持ちよく寝られるところだったのに、突然でかい声  
を出されたもんだから、思わずビッククリして声が出ちゃった。  
どう考へても、わたしがいけないんだけど。

「まったくお前という奴は…」

呆れたように首を振っている。

「す、すみません」

「はあ…。シバにもサイベリアンにも魔法学を教えてきたが、二人  
とも真面目に取り組んでおったのになぜお前だけこうなんだ…」  
と、つぶやいている。

だから言つたでしょ？ わたし、座つてるだけの勉強は嫌いだつ  
て。それに、叔父様の授業つて、本当につまらないのよね。  
なあんて、直接は言えないけど。

「大体、お前という奴は危機感が足りないんだ。このまま魔法学も

身につかないでどうするんだ！？ 兄上だつて心配しているんだぞ

? ぐちぐち…」

あーあ。またはじまっちゃつた。

いひなると誰にも止められないんだよねえ。

叔父様は、王様、つまりお父様の弟なの。

ぱつさばさの黒髪で、髭は無造作に伸ばしつぱなし。ぐるぶしまである黒のローブがなんとも暑苦しく、お父様と並ぶと全然似ていし、正直王族には見えないんだ。

三十歳という若さなのに、見た目は四十代後半だもん。

もうちょっとビシッとした格好をすればいいのにって思っちゃう。そうそう、叔父様は去年結婚したんだけど、ファラさんって言って、とっても優しくて綺麗な人なんだ。

どうしてこんなむさくるしいおっさんと結婚したんだか、今でも分かんない。

あ、王族だからっていうのは多分ないと思つんだ。

ファラさんは隣のフォルト大陸にある、ザラマ国第三王女様だもん。

なんと、まだ十九歳なんだよ。

二人でいる姿をたまに見るんだけど、叔父様ったら、ものすゞおくにやけた顔だつたつけ。

ちょっと気持ち悪いかも…。つて思つちやつたのは絶対内緒よつ

あ、そうそう、叔父様はわたしに魔法学を教えてくれるんだけど、

その実力はお父様の遙か上を行くのよ。

この国では一番目の実力者だつて。

昔は叔父様が国一番だつたらしいんだけど、今はお姉様が一番。

当たり前よね。お姉様は世界でたつた一人、あの魔法が使える人だもん。

だからこそ、お城には留まれず、各地を巡らなくちゃいけないんだ。

國中の人から期待され、お父様やお母様からも期待され、とつて  
も羨ましいなつて思つちやう…。

つて、今はお姉様の話は置いといて、（あんまりお姉様の話はし  
たくないから…）叔父様のお話だつたね。あはは…。はあ…。

「というわけで、お前には一生懸命魔法学を学んでもらわなければ  
ならないのだ。分かつたな！？」

……。

「シェナリアス！？」

「あ！　はいっ！」

やばつ。叔父様のお話し終わつちやつたよ。結局ほつとんど聞いてなかつたし。

まあどうせ魔法学についてのつとちくをうだうだ言つてただけだ  
と思うんだけどね。

「では、先ほどの続きをはじめよう。魔法書の三百六十五ページを開いて」

言われたとおり、魔法書をペラペラとめぐる。

この魔法書には、多くの魔法について語られている。

初步的な魔法から、上級の魔法。そして禁断の魔法まで、何百と  
書かれているのだ。

叔父様の教育方針は『読んで学べ!』なんだけど、正直読んだだけつて実に入らないんだよね。

実際に魔法の練習させてくれた方が、実に入ると思うんだけど、  
叔父様曰く、初心者の実践練習は暴走する危険があるからダメなんだ  
だつて。

まあ、叔父様の考え方も、分かるには分かるんだけどねえ…。

「では、今日は火の魔法、ファイアーボールについて学ぼう」

そう言つと、いつもと同じように、魔法書を読み始めた。

「ファイアーボールは、四大精靈のうちの一人、炎の精靈サラマン  
ディスの力を借り、無数の火の玉を放つ魔法である。威力はその魔  
法を使う者の魔力に比例。詠唱呪文は『

ファイアーボール』である

ええつと…。

？ んもう。こんな長

いの覚えられないよお。

卷之三

「Jの世界の魔法は、詠唱呪文というのかどの魔法にもあるんだけど、なかなか覚えられないんだ。

初步的な魔法だと詠唱呪文は短く、上級魔法になると長いらしい。魔力の強い人は詠唱呪文はなしでも使えるらしいんだけどね。わたしみたいな素人は、ちゃんと詠唱呪文を唱えないといけないんだつて。

魔法にてちよいと不便よね。ホホ。

「ファイアーホールは基礎中の基礎だ。前回教えた風の魔法『ウインドカッター』や、水の魔法『ウォートリング』、そして次にやる地の魔法、『ロックブレイク』は四大魔法の初歩である。しつかりと覚えるように！！」

一  
はあ  
い...」

前回の魔法なんてもう覚えてないよ。

「では、ロックブレイクに移る前に、もう一度詠唱の読み方の復習をしよう」

と、叔父様が呪文を詠唱しようとした時だった。

二〇〇〇年

トーランツウ音」に読者、

「ジーニャス様、ガウストンでござります。至急お話をしたい」とがあるのですが

卷之三

ガウストンつて、確かお父様の使いの一人だ。

一体何事だというのだ!?」

そう言いながら、扉を開ける叔父様。そして、真剣な面持ちの一

人の男が姿を現した。

「勉強中の所、失礼いたします。シェナリアス姫様」

軽く会釈をするガウストン。

わたしもにつこりと軽く会釈を済ませる。

「早急にお耳に入れたいことがござりますので、ジー二ヤス様、ちよつとこちらへ…」

そういうと、叔父様を連れ、扉を閉めてしまった。  
なんだろう…。わたしには聞かれたくないこのなのかなあ？  
そう思つたら、とつても気になつて、扉の方に近寄り、耳を当てる聞いてみた。

なにやらひそひそと話が聞こえるんだけど、具体的に何を話しているのかまでは聞こえない。

わたしはそつと扉を開いてみた。

すると、

「何つ！？ それは本當か！？」  
と、鮮明に声が聞こえてきた。

「ジー二ヤス様、お声が大きすぎます」

「し、失礼した。で、このことは姫には？」

「お伝えになられたほうがよいかと…」

「そうか…。それは大変なことになつたな…」

一体何が起きているというのか？

わたしがどうのこうのつて聞こえたけど…。

まだなにやらひそひそと話をしているようなんだけど、さつきみたいに鮮明には聞こえない。

しばらくすると、こちらの方へ近づいてくる気配を感じたので、扉をささつと閉め、急いでソファーに座り、何事もなかつたかのように、魔法書を手に取つた。

カチリと扉が開き、叔父様だけが部屋に入ってきた。

どうやら、ガウストンはもう立ち去つたようだ。

叔父様は、ちょっと青ざめたような顔でソファーに座り、すつか

り冷めてしまつたローズティーに口をつけた。

「どうかなされたんですか？」

訪ねると、手にしていたカップをゆっくり置き、大きなため息をついた。

「はあああ…。ちょっと困つたことが二つ起つた。一つは、隣のフォルト大陸に魔族が現れたそうだ」

「えっ！？ ま、魔族つて、あの北の大地に昔から封印されてたつて言う？」

「ああそうだ。何千年もの昔、神と魔族との間で起こつた神魔戦争…。神が全ての力を使い、北の閉ざされた大地に封印をしたと言われる、闇属性の魔獣や悪魔達だ。つい先日も遠く離れたディルフェニア大陸で魔族を発見したとの報告を受けたばかりだというのに。まさか…。まさか隣のフォルト大陸に…」

フォルト大陸つて、ファラさんの母国、ザラマ国がある大陸のことだ。

ファラさんが事のことを知つたら、絶対心配だらうな…。

きつと叔父様もファラさんのことを考へてゐるんだろう。とても深刻で、辛そうで、なんと声をかけていいのか分からなかつた。そんなわたしの状況を察したのか、慌てて状況を付け加えた。

「ああ。すまない。ザラマの方ではなく、もつと北の、ノースガリア国の方らしい。なんでも、魔族一匹相手に町が一つ滅んだそうだ」

「ええ！？ 町が一つ…」

滅んだって…。魔族つて一体どんな力を持つてゐるというの！？ わたしは文献でしか魔族を知らない。

破壊と殺戮を求め、人の闇の心に付け込み、心を操る。そして光を持たず、ただただ無を求めるものだと。

なんだか曖昧な表現だけど、もう何千年も姿を現していなかつた魔族のことなんて、知つてゐる人が少ないのも当たり前。

当然、残されている書物や資料も少ないので。だから、なぜ今再び蘇つたのかも分からない。

なんて、わたしはわたしなりに様々な考えをめぐらせていた時だつた。

叔父様が突然立ち上がり、窓の方へと歩み寄り、外を眺めている。その表情は、こちらからは見えないが、とても重々しいものを感じた。

「叔父様？」

そう声をかけると、静かに、ゆっくりと口を開いた。

「シェナリアス、大切な話がもう一つある。とてもとても大事な話だ…」

と、窓の外を眺めたまま言った。

そして、わたしが「なんですか？」と言つ前に、その衝撃の答えを聞くことになるのである。

## 悪夢の足音？

お姉様が姿を消した？ つて、一体どうこうこと？

叔父様が口にした言葉はこうだつた。

「サイベリアンが、ザラマ国領土内のジルコニアの町から姿を消し、すでに一週間も経過しているそつだ…。シバを含め、数十名が行方を捜しているが、未だ見つからんらしい…」

そんな！？ お姉様は勝手に単独行動をするような人じやない。だとしたら、誰かに連れ去られたとか、襲われたとかで、まさか…！？

ううん。絶対そんなことはないよね。

だつて、お姉様ははしつかりしているし、強いもん。それに、もし万が一のことがあつたとしたら、さすがに魔力の低いわたしでも、氣で感じることができるのはず。一応、血のつながった家族だしね。きつと大丈夫！

と、自分に言い聞かせてみても、不安感は残る。

うつむいたまま、お姉様のことを考えていると、叔父様がわたしの頭をぐしゃぐしゃっとなでた。

「なあに暗い顔してんだ！？ 大丈夫。サイベリアンは無事だ。争つた形跡はなかつたというし、公務続きで羽目を外したくなつたんだろう。それに、もしも連れ去られたとしても、あいつはお前と違つて超一流の魔術士だからな、そう簡単にやられはしないよ」と淡々とは言つても、叔父様も心配なんだろうね。笑顔がちょっと引きつってるもん。

サイベリアンお姉様は、わたしより四つ年上の十八歳。

お母様譲りの、さらさらとしたストレートの黒髪。お父様譲りの緋色の瞳。身長も高くて、出るどこ出で、引っ込むどこ引っ込む

つていう、抜群のスタイルの持ち主。

城下町では、サイベリアン様ファンクラブなんつていうのもあるんだって。

そりゃそうよね。お姉様、美人だもん。

それに付け加えて、優秀、まじめ、上級魔術士とくれば、文句なんてあつたもんじゃない。ほおんと完璧な人。

だからわたし、ちょっと苦手なんだ。自分は美人でもなく、優秀でもなく、まじめでもなく、へっぽこ魔術士…。って思つてるから。まるで正反対じゃない？

自分で言つててひどいなあつて思つちゃうけど、本当のことなんだよね。

昔から、お姉様とわたし、結構比べられててさ。本当に姉妹なんか！？ って疑われたこともあつたつけ。

その時は笑つて流すけど、結構ショックなんだよ。

お姉様…。

苦手だけど、やつぱり無事でいてほしい。帰つてきてほしい…。  
どうか、ご無事でありますように…。

その後、叔父様はお父様に呼ばれたとかで、部屋を出ていった。魔族の件も重要なことだけ、クロイツ国にとつては、お姉様の捜索が最重要になる。しばらくは忙しい日々が続きそうだ。  
なあんて、わたしはここにいるだけだから、何にも考える必要な  
んないんだ。

でも、本当にそれでいいのかな？ 自分のお姉様が行方不明なの  
に…。

一人しかいない自室は、とても寂しい。

わたしはベッドに寝転がり、ただただボーッとしていた。  
どれくらいの時間がたつただろうか。すっかり日も落ち、辺りは  
真っ暗。

いつもなら、おなかの虫がなく時間なのだけれど、今はそんな気分じゃないみたい。

「はあ～～」

と、何十回目かのため息をつき、再び天井を見上げた。そして、そのまま深い眠りについてしまったんだ。

どれくらい寝つていただろうつか、

「コン。コン。

というノック音が、わたしを深い眠りから呼び起こす。

「う～ん。まだ寝るう」

「ゴロン。と転がり、ふかふかの布団を頭からかぶる。

「コン。コン。

再びノック音。

「うう～～。だあれえ？ マリーヌ？」

顔だけを布団から出し、呼びかける。

「寝ているところをすまない。わたしだ。大切な話がある。開けてくれないか？」

「わたしさん？」

「ふふふ～。そんな人に知り合いはいませんよお～。

だけど、なんか聞いたことがある声……つてーー！」

「お、お父様！ーー？」

大慌てで飛び起き、ぼさぼさになつた髪の毛を手ぐしでとかし、

服をぱんぱんとたたき、しわを伸ばす。

いつもはパジャマに着替えて寝るんだけど、昨日はそのまま眠つちやつたから、ドレスのまま。

ベッドの横にある、大きな鏡をちらりとのぞき込む。

よし！ とりあえずは大丈夫！

寝起きとはいえ、一応レディーだもの。身だしなみくらいは整えないよね。

鏡に向かって、にこりと微笑む。

うん。いつものわたしだ。

全ての確認を済ませ、お待たせしていたお父様を中へ招き入れた。

「こんな時間にすまないな」

「ううん。大丈夫。あれ？ お父様、どこかへお出かけになられるんですか？」

いつものお父様は、貴重で高価なヴァンバスという真っ赤な生地で織ったマントを羽織り、この城に代々受け継がれているたくさんの宝石の散りばめられた王冠をかぶっている。  
だけど今は、なんとも貧相というか…。

黒い生地の簡素な服に、同じく黒い生地のマント。

普通の人を見たら、王様とは気づかないだろう。  
めったに見ることのない格好だから、上から下までジロジロ見ちゃつたよ。

そんなことも知らず、お父様はソファーへ腰をかけ、わたしにも座るよう促した。

「昨日、ジー二ヤスからサイベリアンの話は聞いたな？」

やつぱりお姉様の件か。

なんとなくそんな気はしてたんだ。

「うん。ザラマ国領土内の町で姿を消したって…」

「そうだ。無鉄砲なシバならともかく、まじめなサイベリアンの方が分からなくなるとは…」

表情は硬く、なんだか疲れた顔をしている。

きっとお姉様のことで頭がいっぱいなんだろうな。  
そりやそうよね。実の娘だもん。

「うん。それだけじゃない。

お姉様が必要なのは、世界でたった一人、あの魔法を使えるから。  
精霊系最高峰魔法にして、闇属性の高位魔族に対抗できる唯一の  
魔法であり、この国の王族に生まれ、選ばれたものしか使うことが  
できない魔法。それは…

## 悪夢の足音？

- 神聖魔法 -

そう…。

お姉様がそれを使えるようになつたのは半年前のこと。  
魔族が現れたのもちょうどその時期。

だから、お父様や各國の王も、これは何か関係があるに違いない  
！ つて調査を進めていたの。

お姉様とお兄様がお城にいないのも、その件について調べるため。  
お父様はお姉様が旅に出るなんて大反対だったんだけど、他国の  
お偉い様方の意見もあって、しぶしぶ調査に向かわせたんだって聞  
いてる。

でもね、裏情報で聞いたんだけど、他国はお姉様に自分の国に来て  
もらつて、万が一魔族が攻めてきた時に備えたいらしいんだ。  
そりやそうよね。魔族が攻めてきた時、お姉様がいてくれたら安  
心だもの。

「ああ。やはりわたしが間違つていたんだ。どんなことをしてで  
も、サイベリアンをこの国に留めておけば、こんなことには…」  
と頭を抱えている。

「お父様のせいじゃないよ。それに、お姉様はきっと無事。遠く離  
れていても、気は確かに感じるから…」

そう言つと、顔をあげて苦笑した。

「そうだな…。こんな姿を見せてしまつて、すまない  
と、いつになく弱氣だ。

お父様のこんな姿を見たのははじめてかもしれない。  
いつもは凜々しく、勇敢で、的確に意見を述べ、この国の王として  
立派に勤めを果たしてきたのだから。

「シエナリアス…。わたしはこれからザラマ国へ向かう。サイベリアンを見つけて絶対に連れて帰つてくる。本来ならば国王であるわたしが自ら動くのは得策ではないのだが、ジッとしている」ことではないんだ

「お父様…」

わたしの目の前に座つているのは、一国の王ではなく、愛する娘を思う、『ごく』く普通の父親の姿だつた。

そんなお父様を元気付けたくて、精一杯の笑顔で言つたんだ。  
「うんっ！ ここは任せておいて！！ わたしだって王女だもん。お父様の代わりくらい立派に勤めてみせる。やるうと思えばなんだけつてできるんだから。だから、なにかあつたら、遠慮なく言つてね」「シエナリアス…。ふふふ。いつまでも子供だと思っていたら、立派なことを言つようになつたもんだ。これなら任せても大丈夫そうだな」

と、いつもの優しい笑顔を見せてくれた。

「そうだよお。なんでも言つて。わたし、お勉強もできないし、魔法も使えないけど、お父様や、お母様の役に立ちたいってずっと思つてたの」

「ありがとう。わたしはこんな優しい娘をもつて幸せだ…。実は今回、シエナリアスにも協力してほしいことがあるんだ」

「えっ、本当！？ なになに！？」

意外な言葉に、興味津々といった感じで、耳を傾けた。

だつて、お父様からの頼まれごとなんて、はじめてだつたんだもん。

「難しいことではないんだがな。シエナリアスはプレイマー神殿を知つてゐるだろう？」

「うん。ヴァーノの町の北にある、ザツフェリアの森にある神殿ね。小さいころ、精霊降臨の儀式とかで何度か行つたことがあるから、なんとなく覚えてる。

「そうだ。その神殿はクロイツ国を守護している大精霊、カルエス

を奉つてゐる神聖な場所だが、魔族バルバイトスを封印した地でもある。各地で魔族が目覺めているという報告を受け、念のためその場所の調査をしたいとの依頼があり……

「分かつたあ！ わたしが神殿の扉を開ければいいのね……」

「ご名答。プレイメー神殿はクロイツ一族でないと開けることはできない特殊な扉だ。ソマリとジー・ニヤスには城を任せぬ。そうするとほかに開けることができるの……」

「うん。任せて！ そのくらい簡単よ！！」

「そうか、助かる。本当はジー・ニヤスに行つてもうつづもりだつたのだが、今回の件で城内も大騒ぎだ。ソマリだけでは不安な面もあるようだし、残つてもらうことにしてたんだ」

確かに、お母様だけでは今の状況下での対応は大変だよね。

お母様の気持ちを考えたら、お姉様がいなくなつたつていふことだけで頭がいっぱいだと思うじ、冷静に判断することは難しいと思う。

血の繋がりはないとはいえ、叔父様も優秀な人だし、人をまとめ  
る力もある。

なにより、お父様が信頼してゐる人だしね。

それよりも心配なのはお母様よね。

お姉様の件で塞ぎこんでなければいいんだけど……。

「ソマリは大丈夫だよ……」

ポツリとつぶやいた言葉だった。

「えつ？ わたしが考へてゐることが分かつたの？」

「とくに、お父様はふふつと笑つた。

「表情を見てれば分かるさ。シェナリアスは昔から顔に出るタイプだつたしな」

は、恥ずかしい。

わたしつてそんな顔に出るかなあ……。

あ、でもマリーヌにも結構言われたことがあるかも。

『今日はご機嫌ですね。なにか良いことあつたんですか？』とか『

姫様はおなかがすくと、不機嫌になりますよね』って。

おなかがすくと…の方は、どんだけわたし食いしん坊なのよ！？  
って思つたんだけど、よく考えてみたら、おなか空いたときに限  
つて、しばらくご飯がなかつたりすると、些細なことでも機嫌が悪  
くなつたりしちゃうんだよね。

うーん。気をつけないと…。

つて、話が脱線しちゃつたから、元に戻そつ。

「お母様、お父様とわたしがいなくなつたら、寂しくないかなあ…  
その一言に、一瞬表情を強張らせたお父様。

「本当は寂しいと思う。わたしにも、ショナリアスにもここにいて  
ほしいと思つてゐる。特に、短い期間とはいへ、ショナリアスが城  
を離れるなんてことは今までなかつたからな。わたしも、シバも、  
サイベリアンも、最近は城を空けることのほうが多い多かつた。城で待  
つソマリにとつて、ショナリアスの笑顔は心の支えだつたんだんだ

…」

その話を聞いて、なんかジーンと来ちゃつた。

「お母様、わたしのこと必要としてくれていたんだね…」

「ああ。ショナリアスといふと、自分も元気になれるつていつも言  
つていたよ」

「なんだか嬉しいな。お食事の時に少しお話したりするだけだから、  
そんな風に思われていたなんて、思いもよらなかつた」

「何気ないやり取りが、彼女にとつては一番の安らぎになつていていた  
んだ」

「そりなんだ…。じんなの、聞かなかつたら全然分からなかつた。  
お母様は、お父様と一緒に公務をこなすことが多い。  
内容も様々だけど、主には国内の統治問題について。  
これが結構めんどくさそうなんだよねー。」

わたしも何回か会議に出たことはあるんだけど、何を話している  
かさっぱり分からなかつたもん。

王妃様つて、お城で優雅に生活しているかと思われがちなんだけ

ど、全然そんなことないんだよね。

「うーん…。わたしもお母様のお役に立てたらいいのに…。

そうだっ！

「お父様、わたし、早く用事を済ませて戻つてくる。そして、お母様と叔父様のお手伝いをして、お父様達の帰りを待つてるよ」

「ショナリアス…。本当にありがとう。わたしも早くサイベリアンを見つけて、シバと一緒に戻つてくる」

「うん…！…ようし！ そうと決まつたら、早く出発しないとなつ頭の中はすでに出発モード。

さわつと立ち上がって、部屋の中をぐるぐる見渡し、なにが必要かな？ そうだ！ あれを持つていこう。なんて考えてたんだから。

「おいおい。すごいやる気だな」

「もちろん！ 王様直々の頼まれごとだしね。それに、早く帰つてきてお母様の不安を少しでも取り除いてあげたいし」

「やる気があるのは良いことだが、もうちょっと聞いてほしいことがあるんだが…」

「あ、そうなの…？」「めんなさい…」

はははは。わたしつてば慌てすぎちゃつた。

もう一度ソファへ座り、お父様の話に耳を傾ける。

「ヴァーノの町までの道のりは馬車で半日だ。城の裏に馬車を手配しておくからそれに乗りなさい。道案内と護衛にはベルナルドとリュカスがいるから、困つたことがあつたらなんでも頼むといい」

ふんふん。馬車で半日と、一人が道案内つと。

あれ？ ベルナルドとリュカスつて、久しぶりだ。

二人とも十五の時からこのお城の兵士で、今はお兄様の元で働いている。

この国で行われる、剣の大会ではいつも上位。毎回優勝のお兄様にはおよばないけど、腕は確かね。

「それと、今回の依頼者達だが、すでにヴァーノの町にいるらしい。ガストニア。シンフォーネ。ザーランド。それぞれの国から一人ず

つの三人だ

「えっ！？ もう着いてるの？」

いつからいるのか知らないけど、しばらく待ってるんじゃないのかな？

「ああ。依頼の手紙はヴァーノの町からだった。おそらく三人でブレイマー神殿に行き、開かなかつたからこちらへ依頼をしてきたんだろう。まさかブレイマー神殿の扉がクロイツ家しか開けられないなんて思つてもみないだろうからな」

「そつか。それじゃあ早く合流した方がいいんだね」

「そうだな。そうそう、三人はヴァーノの町にある「ゴーズ」という宿屋に宿泊しているそうだ。確認時にはこれを見せるといい」

そういうと、懐から『』と白い封筒を取り出し、差し出してきた。

「これって、送られてきた手紙？」

「ああ、そうだ。これなら見せれば、書いてきた本人ならすぐに気がつくだろう」

封筒を受け取つて見てみると、右下に羽の広げた鳥と時計のよくな絵が描かれている。

時の精靈、クロノスを守護する国、ガストニアの紋章だ。

「三人の名前は中に書かれているから、移動中にでも確認するといい。それともう一つ…。シェナリアス、手を出して『』らん」

「？？ 手を？」

言われたとおり差し出すと、お父様がそつと手を被せ、一緒になかを手のひらに置いた。

見てみると、金色のチーンに黒い石のついたネックレスだった。

「これは？」

わたしが聞くと、お父様は自分の首に下げているネックレスを見せた。

「これと同じものだ。これはクロイツ王家である証。身分を証明するときに使いなさい」

「身分を証明するとか…」

黒い石にはクロイツ家の紋章である、金色の翼が描かれている。さらに裏には、不思議な文字が書かれていた。

「金色の翼だけならクロイツ国の使者である証明。裏に文字が書かれているのはクロイツ王家である証なんだ」

「へえ…。この、後ろの文字はなんて書いてあるの?」

「これはわたしにも読めないんだ。文献によると、神が使っていた文字ではないかと言われているけど」

「神様が使っていた文字! ? すごいね…」

なんか、わたしがこんな持つちゃつていいのかなあって思っちゃう。

仮にも王女なんだから、良いに決まってるんだけど。

「いいかい。これは本当に必要な時にしか見せちゃいけないよ

「うん。分かった」

王族は常に狙われやすい。

それは小さいころから聞いてたから、なんとなく分かる。

『世の中には国のやり方を快く思ってない人もいる。それに、王族と知つて近づいてくるものもいる。人を疑うことは良いことではないうが、用心は必要だ。だから、城の外に出るときは王族という身分を悟られてはいけないよ』

お兄様がはじめて国を出るとき、お父様が言つていた言葉。なぜだかしつかり覚えてる。

「わたしはもうじき出発する予定だ。シエナリアスは用意を済ませ、お昼ごろ出発するといいだろ?」

「うん。分かった! お父様も気をつけて」

こうしてわたし、はじめて城を発つことになつたんだ。  
これが長い長い、旅のはじまり…。

## 必然の出会い？

ヴァーノの町へ続く街道。

辺りは草原が広がり、奥には国境のシクレイマス山脈が連なっている。

ちなみに、あの山脈を越えるとガストニア国。  
だけど、まずあの山を登つて両国へ行こうという人はいないだろうね。

というのも、シクレイマス山脈つて、六千～八千メートル級の山々だから、そう簡単にはいかないの。

じゃあどうやつたらガストニア国にいけるかといえば、ヴァーノの更に北にある、キュリアムの港町からなら、ガストニア国領土の港町、ハザインまで行ける。

ガストニアとシンフォーネ、ザーランドの国はシクレイマス山脈のような障害がないから、交流が盛んみたい。  
クロイツ国だけ海と山に囲まれているから、振興を深めようにもなかなか難しいのよね。

ガストニアに行くにしても、最低一週間はかかるもん。

あ、もしかしたら、今お父様が向かっているフォルト大陸大陸のザラマ国の方が早く着いちゃうかも。

ザラマ国はクロイツ国のあるカノン大陸から西側に位置しているんだけど、港町からすぐ近くだし。

ふふつ。詳しいでしょ！？　いづれはいろんな国に行つてみたいと思っているから、地理に関してはちょっと得意なんだ。

あ、そうそう。あれからお父様と別れて、早速準備。そして三十分ほど前にお城を発ったの。

本当はお母様や叔父様にお見送りをされる予定だったんだけど、急なお仕事が入っちゃつたから、ひつそり出発したんだ。

お城から出る時つて、大体國中の人们からもお見送りをされるんだ

けど、今回はなんてつたつてお忍びだからね。

お城の裏道からこいつそりと馬車で出たんだ。

なんか、こんなのはじめてでほんとわくわくするよ。

そうそう、目立っちゃいけないから、服もドレスから着替えたの。前から憧れてた服なんだけれどね、実は、城下町にあるカルストーレ魔法学校の制服なんだ。

そここの生徒さんが一年に一度、上級魔術士の魔法を見に来て。がつて、その時にその制服を見たんだけど、かわいいのなんのって。

色はネイビーでちょっと地味な感じもするけど、首元に赤いリボン、右ポケットには校章とおしゃれな感じ。そして、タイトスカートいい感じ。

生地は伸縮性が効いてるから、動きやすそうだし。  
え？ よくすぐ手に入つたね。 って？

そうなのよね。なんか動きやすい服ないかなーって聞いたら、なんと、叔父様がこの洋服を用意してくれたのよ。  
びっくりでしょ！？ サイズまでピッタリだつたし…。  
なんかちょっと怪しい感じもするけど、ま、いつか。

「うーん。風が気持ちいいなあ～」

気分もよかつたし、馬車から顔を出してみると、

すると、即座に、

「姫様！ 危ないですからおやめください」

と、大慌てで注意してくるのは、わたしの田の前に座つていたリュカスだ。

そうだ。すっかり忘れてたよ。今回の旅に一人がいることを…。  
てかこの二人のせいだ、記念すべきはじめての旅がブルーになりそうなんだよ。

なぜかといえば！ とにかく口がうるさい…。

特にリュカスよ。

出発する時も、「姫様！ 走つてはいけません！！」とか「姫様！ おしとやかにしてください！」とか…。ちょっとくらいはしゃいだつていいじゃん。と、心中で文句。わたしはほつぺたをふくつと膨らませ、むすつとした顔で席に座つた。

「まあまあ。リュカスは姫様が心配なんですよ。そのお身体に何かあつたら大変ですから」

と、リュカスの隣に座つているベルナールがフォロー。

そうは言われても、なかなかすぐには機嫌はよくならない。ていうか！ 一年前くらいは一人とも敬語じやなくて気軽に話してくれてたのに、久しぶりに会つたらすっかり変わっちゃつてさ。なんか嫌な感じー。

そうなのよ。前はよくお兄様を含めた四人でよく遊んでいたの。剣の修行の合間だつたから、そんな一日中遊んだりとかはしていなかつたけど、退屈してたわたしにとつては、とても楽しい時間だつたんだ。

何より、お城の中で働いている人は、王族への気遣いがすこいんだけど、一人は隔てなく接してくれて、それが何よりよかつたの。それが今じやあれだもの。

「はああ……」

思わず大きなため息が出ちやつた。

「どうかなされましたか、姫様？」

と、ベルナールが心配そうな顔で覗き込んでくる。

「ううん。なんでもない……」

わたしがそういうと、一人は不思議そつに顔を見合わせ、リュカスが顔を近づけて、

「ははあん…。お前、俺らが変に扱うから機嫌悪いんだろう？」と言つた。

「えつ？」

と、驚くわたしに、慌てるベルナール。

「お、おいっ。姫様になんて口の聞き方するんだ。もう昔とは違つ  
んだぞ！？」

当の本人はへっちゃらな顔で、

「いいじゃん。城からもずいぶん離れたんだし。てかこいつ相手に  
敬語とか疲れるわ。ジーニャス様直々に丁重に接するようにとか言  
われたけど、もう耐えらんねえ！」

と言つたんだけど、その発言に、わたしとベルナールが顔を見合  
わせ、「ふふふ」って噴出しちやつた。

「あはは。何それー！」

「ははっ。お前信じられないわ。まあ俺も疲れたけど」「  
だりお？ それに俺は元々敬語とか苦手なんだよねー。どうせお  
前だつて俺らに敬語とか使われたくないだろ？」

「もつちろん。というか、一人とも別人のようで気持ち悪かつたよ  
「な、なんだとおーー？」

と、リュカスが拳をかかげて迫つてきた。

「きやーっ！」

と逃げるようなふり。そして再び馬車に笑い声がひびく。  
よかつたあ。二人とも全然変わつてない。

「じゃあこれからは普通に接するつてことでいいなー？」

その質問にはもちろん大きく首を振つて、

「うんっ！…

と答えた。

「あー…。ほんと肩こったわ～」

と首を回すリュカス。

「俺も…」

そいつてベルナルルまで首を回しあじめた。

なんなのこの光景。

「そついえばや、シエナもシバとは会つてないんだよな？」

首をコキコキと鳴らしながら聞いてくる。

「え？ あ、うん。そうだよ」

「ちょっと今ドキッとしたしゃつた。リュカスがわたしのことシエナつて呼んでくれたよね？」

なんかとっても嬉しいな。覚えててくれたんだ。

シエナつて言つのは、リュカスと出会つたときに付けてくれた呼び名。

「シエナリアスつてよびにきいからシエナでもいいよな？」

つてことど、シエナになつたんだ。

「はつ？」つて思つたんだけど、あだ名とか付けられるのはじめてだつたし、OKしたんだ。

結局その名前で呼んでくれたのはリュカスとベルナール。そしてお兄様だけだつたけどね。

あ、さすがにお父様やお母様の前では普通だよ。

そうだつ！ お忍びの旅つてことだし、この先名前を聞かれたら、シエナつてことにしておこつ。

「シバは元気にやつてるかなあ…」

とベルナールがつぶやいた。こちらもすつかり普通のしゃべり方だ。

「うん。元気みたいだよ。一週間ほど前に手紙届いてたし」

「そうか。それはよかつた。シバがここを出てから一ヶ月…。サイベリアン様の件もあるだろうし、まだ当分は戻つてこれないだろうな」

ベルナール、お兄様のことが心配なんだよね。元々とても仲がよかつたし。

「うーん。シバがないと剣術にも磨きが入らないんだよなあ」

「うんうん。つてお前はシバがいても稽古サボつてるじゃないか」

「あれ？ そだつけ？」

つてしらばつくれた顔。

ほんと調子いいんだから。

ね。あ、今更なんだけど、簡単にリュカスとベルナルルの紹介をする

リュカスとベルナールは二人とも十九歳。二十歳のお兄様とも年が近いし、余計に

二十歳のお兄様とも年が近いし、余計に気が合うのかもね。

本当はお兄様と一緒に旅に出る予定だつたんだけど、城の戦力を

考え、二人は残ることになつたんだ。

普段はたやんとした訓練服でかこむり身体をかこむ! なんだけ  
べ、今は怪我せよ。 朝はうやうに帶つていいからサーカス。

まあでも、のどかなところだし、魔獣や魔物はあまり出ないって

聞いてるから、劍の出来はなれ。

ほらね。魔物がつて！

## 声にならない声。

黒車が突然猛スピードで走り出したもんだから  
ハーンスを崩してやつた。

「シエナ、大丈夫か！？」しつかり捕まつてゐんだ！！」「と、リュカスが起こしてくれた。

「あ、あっさり！」

馬車はスピードを落とさず、時折強い揺れをお越しながら走つて  
いる。

「あ、二つ。」  
「うわー、どうしたの？」

ベルナールが馬車を引いてくれておじさんに怒鳴る。

「ひいいいいいい！」

「我を忘れていいのうつで、ベルナールの声が届いていないのうつ

か？

「ちつ！ リュカス、外の様子は！？」

「いんや…。特に変わったところはないさそうだ。なにか見間違えた  
んじゃないか！？ あつ！ こらつ！！ お前はそこでジツとして  
ろ！！」

「むぎゅっ！」

ひ、ひどい。頭押し付けられた。

わたしだって外の様子が見たいのにー。

馬車はしばらく走り続け、やがて冷静を取り戻したのか、緩やか  
な川の流れるほどりで停車したのである。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6965m/>

---

クローリアス～ハジマリノウタ～

2010年10月8日11時44分発行